

いばらき春秋

2026.9.21

「世界は広く、色々な人がいることを知ってほしい」。障害者スポーツのゴールボール女子日本代表として活躍する高

橋利恵子選手（関彰商事所属）

の言葉が心に刺さった▼第二次世界大戦で視覚に傷害を受けた傷痍軍人のために、リハビリテーションプログラムとして考案された競技。幼いころから弱視だった高橋選手は高校時代に競技と出合った▼鈴を入れ、音が良く聞こえるように穴を開けたボールを投げて得点を競う。鈴の音を頼りに攻防を繰り広げるのだが、審判が最初に「クワイエットプリーズ！（お静かに）」とコールし、観客はプレーを邪魔しないよう静寂を守るのが特徴的だ▼高橋選手の小学校への出前授業を訪ねた。児童は目隠しを着け同じ条件で競技を体験。体の大小や性別、運動神経の良し悪しは関係なく、見ている児童も分け隔て無く応援していたのが印象的だった▼試合中、自分も目を閉じて鈴の音の行方に聴覚を研ぎ澄ましたが、とても難しく、真っ暗な世界が怖くなってすぐ目を開いた▼「多様性」という言葉の急速な広まりとその使われ方に、私は多少の違和感を感じていた。ただこの日、高橋選手と子どもたちの交流に触れ、心の中のものもやが少し溶けた気がした。（豪）